

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗

第66回



ヒドゥン・カリキュラム (2) 気をつけ、礼！

★「気をつけ、礼！」

組手の練習が終わりましたので、これから休憩時間です。指導者が、「気をつけ、礼」と言って、みんなで礼をして休憩時間に入ります。しかしながら、みんなで“気をつけ”しているときに、手を止めずに自分勝手に防具をはずしている子がいます。帯がほどけたので縛っている子もいます。そこで指導者は、〈あれっ、気をつけしていない子がいるなあ、でもみんなすぐに休憩したいだろ〉と黙認して終わりの礼をしてしまいます。

そして、休憩時間になると“鏡に触らない”、“道場の中を走らない”、“ガラスの近くで暴れない”などのルールを破り、暴れまわる子が続出します。そこで、「こらっ！」と叱ることになります。

ここでの問題点は休憩時間の過ごし方ではなく、気をつけしなかった子たちを指導者が黙認したことに根本的な原因があります。

★まじめにやると損する

さきほどの「気をつけ、礼」のとき、子供たちは以下のように感じていたことでしょう。

《防具をはずしていた子》

「先生に見つからなかった、良かった。いや見つけていたかもしれないけど、何も言われなかった。これで僕だけすぐに休憩に入れるから5秒は得したな。休憩時間もちょっとくらい暴れまわっても大丈夫そうだな。」

《まじめに気をつけしていた子》

「あの、ずるい。私も次からみんなで気をつけするとき、防具をはずそう。気をつけって言われても別に気をつけしなくていいんだ。まじめにやると損するから、次から先生の言うことはあまり聞かないことにしよう。」

前回の連載でも取り上げましたが、これも典型的なヒドゥン・カリキュラムの例です。ヒドゥン・カリキュラムとは、「こちらが意図していないメッセージを、無意識下で無自覚のうちに相手に伝えてしまうこと」です。この場面でも、指導者はそんなつもりではないのに、意図したものと異なるメッセージを子供たちに伝えてしまっています。

指導者の意図は「気をつけ！〈あれ、防具をはずしている子がいるな、まっいいか〉、礼！」の程度ですが、指導者から子供たちへのメッセージは、次のように伝わっています。

「みなさん、先生が気をつけ、と言ったときは、別に気をつけしなくても構いません。防具をはずしたり、帯をしばったり自由です。だから、真面目に気をつけしている人は馬鹿ですね、損しています。先生の指示は軽いので、守らなくてもOKです。」

★「休憩は1分短くなりました」

それでは、どのような対応をしていけばよかったのでしょうか？ 子供たちに正しくメッセージを送るために、以下のように毅然とした態度で指導しま

す。

「手を止めなさい。今、防具をはずすことはできません。全員が気をつけしないと先生は終わりの礼ができません。動かしている手はどこにつけますか？ こうやって、指導している間に1分経ちました。君はみんなの休憩を1分奪ったことになるのです。君にとっては1分ですが、ここには25人いますので、みんなから25分奪ったことになるのですよ。こういうときは、自分のことではなく、みんなのことを優先することがとても大事ですね。」

さらに、「みなさん、たった今、休憩時間は1分短くなりました！」のように宣言すると、「えー！」と不満そうな声を出します。そこで「そんなこと言っただって自分勝手なことをやっている人がいるから仕方ないじゃないですか。先生は別に意地悪はしていませんよ。全員、気をつけしてもらわないと先生も終われないんです」のように言います。このように、いかに自分勝手な行動が皆に迷惑をかけているか、分からせなくてはなりません。

★「個」と「公」

自分の手を止め、みんなのこと、つまり「公」を最優先していれば、すぐに休憩に入ることができました。しかしながら「自分の利」を優先することで、言い換えると「個」「私」を優先することによって、他の子たちの利を奪い、「公」に損害を与えています。“自由権は公共の福祉の範囲内で認められる”、と中学生のとき日本国憲法の授業で習いましたね。公共の福祉を尊重せず、他人の迷惑も考えず、各人が自由に振舞う社会は混乱を来します。このように、

ある人の基本的人権は、他の人の基本的人権を侵害することが多々あるのです。子供たちに、「自由とは、あくまでもみんなの迷惑にならない範囲での自由だ」ということを分からせなくてはなりません。最近、自分の権利ばかりを主張する大人が増えました。子供たちはそのような大人を見て、「私」を優先することは当然の権利だ、と勘違いしている節があります。

しかしながら、“他人に迷惑をかけない”教育が行き過ぎると、子供たちが“困ったときに助けを求めず我慢してしまう”などの弊害もありますし、基本的人権つまり各人の自由は絶対に守られなくてはなりません。とはいえ、“新幹線の中を走り回る自由”、“みんなが並んでいる列に割り込む自由”、“図書館で大声で騒ぐ自由”、“みんなが挙手しているときに一人だけ勝手にしゃべりだす自由”などは存在しないのです。それを見逃す社会は、「他人の迷惑は考えず、自由に何でもやっていいんだよ」と、子供たちに間違ったメッセージを送っていることになるのです。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞数の記録更新中。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12



どうやって道場生 350名に増やしたか？ その19

■あえてデメリットから話す

体験入門初日、いよいよ電話で予約したママさんと会う日です。空手着無料キャンペーンの話、道場の試合成績をアピールなど、道場のメリットを中心に話していきます。しかしながら、道場のメリットばかり聞いていると、だんだん胡散臭く感じてきて、これらはすべてウソで、私を騙そうとしているのではないかと、ママさんは疑念を持ち始めます。

そこで、道場のデメリットを、あえてこちらから先に明らかにしてしまいます。たとえば、「養正館は、初級・中級・上級・有段と4クラスに分かれていますが、クラス分けしているのに、先輩と後輩の交流がほとんどありません。これは大きなマイナス点です」とあえてデメリットから話します。

ママさんの表情が一気に強張りますが、構わず次のように続けま

す。「しかしながら、クラス分けすることで、稽古時間すべてをその子その子に最適な内容できめ細かく指導できます。もし、すべての帯の子がいっしょに稽古すると、どうしても黒帯の子は教える役ばかり、黒帯の練習のときは白帯は座って見ている、などとなってしまいます。よって、クラス分けは、他の道場には無い大きなメリットでもあるのです」のように説明します。すると、ママさんの表情が、パッと明るく変わります。

このように、自らデメリットを明らかにすることで、何も隠し事をしていない、誠意のある道場だと印象づけられます。さらに先ほどのデメリットが実は大きなメリットでもある、と展開していくのです。メリットを強調するための前振りとして、あえてデメリットから話すのです。